

稱讚

一三三二号

二〇一二年五月一日発行

実におの世においては、
怨みに報いるに怨みを以てし
たならば、ついに怨みの息む
ことがない。
怨みをすててこそ息む。
これは永遠の真理である。

『ダンマパダ』中村元師訳

故・末松欽一さんに誘われて「日本の青空」という日本国憲法が策定されるときに民間作成者たちの思いが描かれた映画を視たことがあります。

JHQに言われるままに作成された憲法ではなく、世界に誇れる憲法と知りました。この間、NHKスペシャル「戦後ゼロ年 東京ブラックホール1945-1946」



を視ました。私は、あれだけ荒廃した東京が、復興するのにどうやってこられたのだろうと思っていました。誰もがご苦労されたことは分かりますが、そこには、闇がいくらでもあったことを知らされました。

東京裁判で、インドのパール判事が、「平和に対する罪と人道に対する罪は戦勝国が作った事後法であり、それをもって裁

くことは国際法に反するとして、被告人全員の無罪である「意見書」を出され、現在の日本人でもそのパール判事の心に感銘しております。また、サンフランシスコ講和条約調印の際に、スリランカ代表が「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。」の言葉を用いて、日本に対する賠償請求権を放棄したことで有名です。また、台湾の蒋介石元総統も「怨みに報いるに徳を以てする」と中国古典を引用して、賠償請求をしませんでした。

今、ロシアがウクライナに侵攻して二カ月が過ぎました。一刻も戦闘状態が終息して欲しいのですが、もしかすると、五月九日には、プーチン大統領は、名実ともに宣戦布告するかもしれません。事実、既に戦争だと思えますが、その最中、各国では防衛費の増額をとなえたり、憲法改正をとなえたりして、世論の同調を得ていることを憂えるところがあります。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

日本国憲法 前文

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。

そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

上記の「日本国憲法前文」を今一度読んで参りたいものだと思います。

稱讃寺

親鸞聖人 降誕会 ご案内

日時 五月二十一日（土）

午後二時より

日程

- 一四：〇〇 おつとめ
- 一四：四五 法話 住職
- 一五：三〇 恩徳讃

※築地本願寺では、法要がライブ中継されますので、

ご参拝な
さつてみて
ください。

春に形なし

芽をふかせ

花咲かすはたらき

仏に形なし

メザメさせ

生き抜かすはたらき

『学仏大悲心 ほとけのおしえ
詩と言葉』 大神信章氏著



YouTube
築地本願寺チャンネルにて
配信いたします

現世利益和讃について

六首目

なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふれば

してんだいおう

四天王もろともに

よるひるつねにまもりつつ

あくき

よろづの悪鬼をちかづけず

悪しき鬼なり

【意識】

お念仏を称えると、
四天王たちが共に
夜も昼も休み無く護り、
あらゆる悪鬼、悪魔が近づかない。

【出拠】

「仏のたまはく、へもし人もつばらこの
念弥陀仏三昧を行ずれば、つねに一切の
諸天および四天王・竜神八部の随逐影護
し、愛楽相見することを得て、永くもろ

もろの悪鬼神、災障・厄難をもつて横
に悩乱を加ふることなし」
（般若三昧経・意）

（『註釈版聖典』七祖篇六一九〜六二〇頁）
（『三帖和讃ノート浄土和讃篇』豊原大成氏著）
〈四天王〉

仏教観における須弥山・中腹に在る四天王の四方にて仏法僧を守護している四神（東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天、北方の多聞天）をいう。

〈持国天〉（東方天）（提頭頼吒）
梵名・ドウリタラーシユトラ

須弥山東面の中腹である第四層の賢上城に住み、東の方角、東勝身洲（弗婆堤）を守護するとされる。

〈増長天〉（南方天）（毘楼勒叉天）
梵名・ヴァルダカ
須弥山の南瑠璃埵（みなみりた）に住み、南の方角、南誹部洲（閻浮提）を守護するとされる。

〈広目天〉（西方天）（毘楼博叉天）
梵名・ヴィルパークシヤ
須弥山の南瑠璃埵（みなみりた）に住み、南の方角、南誹部洲（閻浮提）を守護するとされる。

眼、千里眼と拡大解釈された。
須弥山の白銀埵（はくぎんた）に住み、西の方角、西牛貨洲（瞿陀尼）を守護するとされる。

方角、西牛貨洲（瞿陀尼）を守護するとされる。

〈多聞天〉（北方天）（毘沙門天）

ヴェーダ時代から存在する古い神格でありインド神話のヴァイシュヴァナを前身とする。ヒンドゥー教においてはクベーラともいう。インドにおいては財宝神とされ、戦闘的イメージは殆ど無かった。初期仏教の段階でクベーラは仏塔の守護者、四天王として配置・利用され、中世に至るまでクベーラの名称が用いられ、鳩鞞羅、拘鞞羅、金比羅として言及されている。中国に伝わる課程で武神としての信仰が生まれ四天王の一尊たる武神・守護神とされるようになった。毘沙門という標記は、音写したものであるが「よく聞く所の者」という意味にも解釈できるため、多聞天とも訳された。帝釈天の配下として、仏の住む世界を支える須弥山の北方、北俱盧洲（鬱单越）を守護するとされる。日本では四天王の一尊として造像安置される場合は「多聞天」、独尊像として造像安置される場合は「毘沙門天」と呼ばれるのが通例。室町時代末期より日本独自の信仰として七福神の一尊とされ、江戸時代以降は特に勝負事に利益がありとして崇められる。

（ウイキペディアより）



四天王をカウンセリングの視点から見られた故大須賀発蔵先生の『ひびきあう心』には、次のように解説されておられます。

1 多聞天

多聞という意味が、本当に衝撃になって、ぱっとどいてきたのです。カウンセリングでこれがなかったら絶対駄目だといつても言われていることは、アクティブ・リスニングとすることです。もし、カウンセリングを集約していったら、このアクティブ・リスニングをはずすとカウンセリングは成り立たないというような、そのいわば中心の中心みたいなことが、ここに名前になっていくのですから。

多聞の「多」というのはアクティブと訳

してもいいんじゃないで

しょうか。「聞」はまさ

にリスニングですよ。

アクティブ・リスニング

を「積極的傾聴」という

ふうに誰かが訳して、日

本語であって日本語でな

いような言葉だけれど、

むしろ多聞のほうがいい

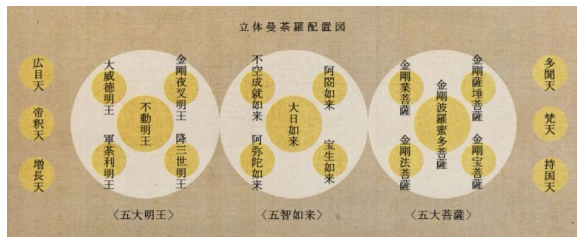
ように思うぐらいに私は

思いますけれど、多聞天

の前に立ったとたん「こ

れはまさにアクティブ・

リスニング。だからいん



おちを守るんだ」と、はっと思ったんですよ。これまで、本当に相手の心に耳を傾けることによって、真ん中の曼荼羅として象徴される私たちの心は成長、発展していくことを常日ごろ、体験的に学んでおりましてから。・・・

仏教では、太陽は東から出て南に登り、西に傾いて北に沈み、そしてまた東から出てということと東より南より西より北と巡る、一つのいわば循環の秩序があります。東南西北という順序であるとすると、多聞天の置かれる北は、順序としては一応最後だということとはわかっていましたから、多聞、アクティブ・リスニングということと私たちのいのちを守護されるとするならば、これを可能にする要因が一つ前にあるはずで

2 広目天

広目天というのはどういうことかといえ、これだつてカウンセリングのことに関心を持つていたら、はっと思えますよ。カール・ロジャースさんの場合だったら「無条件の（肯定的尊重）」という意味で、アンコンディショナル（・ポジティブ・リガード）ということになりますよね。要するに条件つきでない、つまり自分自身の価値を持つんだけれども、よその人にも価値があるんだということと認めていくといえますか、違った価値をまさに受け入れることができてるこそ無条件です。

私は青い蓮の花で、青い茎を命綱とすれば、青い命綱につかまって自分は青としてのいのちを生きていて、そしてそれを極楽世界で受け入れていたでいてるわけです。ということ、それと同じように黄色い方も、赤い方も、斑色の方も、それぞれの色のそれぞれの命綱があるわけでしょう。仮に青い色としましたが、その青い私自身にとつては、青の命綱が、自分にとつてのまさに命の綱なんです。だからそれをもしNOと切って切られてしまったら生きられなくなってしまうのです。それほど大事なわけですよ。そしてそれはどの人もみんな、私だけの色の命綱が私にとつて大事なもの、それぞれの人にとつて、その人の色の命綱が絶対に大事なわけですよ。この場所でもそうでしょう。みんな同色のいのちを生きているわけではなくて、それぞれに違った価値観やいろいろな特色を人間として受け持つて生きていて、しかしそれを別の人から見ると、「私とは違う色だから」ということで命綱を切られたら生きられなくなってしまうですよ。だからそれらの差別相一みんながそれぞれに違うんだということ、自分のいのちには自分にとつての命綱が大事なように、この人のいのちにはこの人の命綱、あの人のいのちにはあの人の命綱と、そのいのちは違いそのままに平等なんだと。そして極楽の池に咲いている蓮の花のようにみんなそれぞれ色

は違うけれど、そのままに平等なんだということは、それぞれのいのちが差別相として平等性、違いそのままで平等ないのちそのものなんだという深い捉え方ですけど、それは無条件にまなざしを注ぐということから得られることですよ。それでなるほどなあと思つて、そういう広目の、広い心のまなざしを持つていなければ、「相手の枠組みで生きていらつしやるところは相手のものとして深く聴いていく」なんてことはできないわけですから、二つともちゃんとカウンセリングのプロセスのものなんですよね。そういうことに気がついて「いやあ、すごいことだな、だからいのちを守るんだ」とびっくりしたわけです。

3 増長天

増長天というのは要するに発展させる、育て守る働きをする「人」のことをいいます。カウンセラーも、先生も、会社でいえば、社長なども増長天の一人だと思えます。増長と聞くと、よく増長するなっていうことで、思いつがるなという意味で言いますけど、あれは「増上慢」という言葉の俗語として使われているものです。「増上慢」でもいいですね。慢心を増長させるな、つまり思い上がりを大きくするなという意味です。増長天は、宇宙生命をいのちという言葉で先ほど言いましたが、その「いのち」を守り育てる、まさにいのちの

増長を図つていくところの働きが増長天なんです。

4 持国天

よく景気が悪くなつたらインフラ（社会的生産基盤）をどうするなんて盛んに言いますけれど、要するに持国天の「国」というのは「場」で、その場というのはいちろん物理的な意味での場ということだけではなめでしょうけれど、ハードもソフトも含めての諸条件を作つていくということで、この持国の「待つ」というのは、維持する、そのために作つていくということなんです。いのちを守るといふ働きを考えてみると、まず第一番目はいのちの存在するための条件づくり、成長発展を図るための条件づくりから始まるということで、これは持国天の働きです。

児童相談所のようなところでも、いろんな設備条件というものが整つて（持国天）、そこに活用するところの人が配置されて（増長天）、そしてそこにいる子どもたちに触れていく場合も、みんな一人ひとりのいのちがそのまま大事なことを広く捉えることのできる心のまなざしを持つて（広目天）、そして今度は一人ひとりに耳を傾けて（多聞天）、そしてそのいのちによつていのちは育つていくわけですから。

〈悪鬼〉 日本や中国・朝鮮半島などに伝わる人間たちに対して悪をばらまく鬼たちの総称の一つ。邪鬼（増長天が足で踏みつけている）、悪魔なども総称される。また、人間を外から疫病や災害や社会構造などで害するもの（外魔）と内から欲望や精神や信仰心などを操作して害するもの（内魔）とに大別できるともしている。

親鸞聖人は、『一念多念証文』で「信心ある人をばひまなくまもりたまふなり。まもるといふは、異学・異見のともがらにやぶられず、別解・別行のものにさへられず、天魔波旬にかされず、悪鬼・悪神なやますことなしとなり。」とおっしゃつておられることから、「自性唯心」に沈んでいる私のこころ（煩惱）を指しておられると思います。

※「四天王」について、ふと思つたことは「二尊院」の存在です。当時本山といわれる大寺院は、寺領の維持拡大、僧兵、権力争いを続けていきましたが、二尊院は、天台宗・真言宗・律宗・浄土宗の僧たちが教義研鑽していた場だと聞きます。天台宗の聖覚法印の『唯信鈔』隆寛律師の『一念多念文意』を何度も書写されました。また、慈善活動、土木活動に従事した僧侶（無戒名字の比丘）も居られました。親鸞聖人はそういう方を本当の仏教を護り、伝道し続ける「四天王」に例えておられたかなあと。

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

「親鸞聖人が生きられた

時代の日本は？」

山田雄司氏（三重大学教授）

親鸞聖人は一一七三年―一二六三年、すなわち鎌倉時代前半から中期にかけての日本を生きられました。そのころはどのような時代だったのでしょうか。

一般的には、これまでの「腐敗した」京都の朝廷にかわって、源頼朝により「清廉な」鎌倉幕府が樹立され、朝廷に取って代わって日本を支配し、時代が刷新されたかのように考えられています。実際のところどうなのでしょう。

一二二一年の承久の乱以前は、幕府の支配する範囲は東国に限られていました。幕府軍が乱に勝利したことにより、西国の荘園・公領にまで鎌倉幕府の御家人が地頭として任命され、幕府の支配が全国に及ぶようになりました。そして地頭は武力を背景にして、荘園や公領への支配力を強め、治安維持や年貢の取り立てなどを行い、支配を拡大していきました。

このように、しだいに新たな統治機構と

しての鎌倉幕府の支配が全国に及んでいったのですが、実は法律は全国で統一されたものではなく、公家だったら公家法、武士だったら武家法、それぞれの寺社や荘園だったら寺社法・本所法によって判断されることになっていました。また、古代・近世と違って戸籍もなく、日本全体で統一的に人々が支配されていたとはとても言いがたい状態でした。

そうした状況のなか、一般の人々の生業はどのような状況だったのでしょうか。農民たちは土地の生産力を安定させるため、刈敷・草木灰といった肥料を使用し、鉄製農具も利用されるようになり、荒地開発、用水路づくりなどの土木工事が行われて生産力が向上しました。また、田畑へ水をあげるために水車を使用し始め、牛馬耕も行われるようになったことにより、畿内・西国では二毛作が始まりました。

こうした耕地開発の進行、農具・農業技術の改良による生産の増大にともない、それに触発されて手工業者が自立し、地域ごとに特色ある手工業製品が生産されていきました。そして手工業の発達は、余剰生産物（商品）の交易の場である市を生み出すことになりました。十二世紀頃から荘園村落に生まれ始めた市は鎌倉時代に入るとその数を増し、月に三度開かれる定期市（三斎市）に発展し、さらに室町時代になると六斎市となって発展していきました。定期

市では生活に必要な物資が売られる一方、農民は年貢の余剰を売って金銭を稼ぎ、道具や足りない食料を手に入れました。また鎌倉時代には宋銭が全国的に流通し、各地で商業製品が生産されるようになったため、商品の運送を専門に行う人々も現れ、年貢運送の代行を行う業者が出現するなど、商業・運輸業も発展していきました。

このように、農業における生産性が向上し、商工業も一定の発展を遂げたのですが、生産は自然の影響を受けるところ大であり、さまざまな災害に見舞われました。鎌倉時代に起きた大きな飢饉としては、寛喜の飢饉（一二三〇から三二）、正嘉の飢饉（一二五八と六〇）、元徳の飢饉（一三三〇）が知られています。鎌倉時代には寒冷化が進んだとされ、飢饉の際には餓死者の死体があちこちに放置されていたと記されています。

また、『吾妻鏡』によれば、地震については毎年のように起こっていることがわかります。一二九三（正応六）四月十三日に発生した大地震では鎌倉に大きな被害を及ぼして津波も発生し、死者は二―三万人に及んだと推定されています。承久の乱をはじめとした大小の戦乱も各地で勃発し、人々は毎日の生活をどのように送ったらいのかという不安を常に感じていました。一方、中世は「宗教の時代」とも呼ばれる

ほど、国家から庶民に至るまで宗教が大き
な影響を与えていました。人々は日々の幸
福を神仏に祈り、病氣治しも修験者や民間
陰陽師などに頼り、国家の安泰は顕密仏教
が担っていました。東大寺・興福寺・延暦
寺・東寺といった大寺院は天皇護持・国家
安泰の祈禱をすることが最大の役割でした
しかし、祈禱をすることで災害を減少さ
せることができたでしょうか。相次ぐ戦乱
飢饉・疫病を前にして、「呪術的」な仏教
神道・陰陽道は無力でした。そうしたこ
ろに、個人の心の救済を図ろうと登場した
のが、法然・親鸞・日蓮・一遍といった
わゆる「鎌倉新仏教」と呼ばれる仏教を打
ち立てた僧侶たちでした。こうした仏教は
これまでの国家と強く結びついた顕密仏教
の考え方は大きく違っていたので弾圧さ
れることになり、うねりとしてもまだまだ
小さいものでしたが、確実に信者を増やし
室町時代になると社会全体に広がっていき
ました。

現代と比べたら明らかに経済的に未発達
な中世社会ですが、いったいどちらの方が
人々は幸せを感じているのでしょうか。どうし
たら心の安住を得られるのか、幸せだとい
う実感を得られるのか、その命題を解決す
るために現れたのが法然・親鸞・日蓮・一
遍といった僧侶たちだったのではないで
しょうか。先の見えない昨今、私たちは苦
悩の中から立ち上がった僧侶たちが伝えた

かったことを深く学んでいく必要があるの
ではないでしょうか。

Q 浄土真宗で救われるとはどういうことす
か？

A 親鸞聖人は、「すくい」ということを、
「救」「拯」「済」の字で明らかにしてくださ
いました。そこでこれらの字の意味を考えなが
ら、親鸞聖人が明らかにしてくださった「すく
い」について考えてみたいと思います。

まず「救」ですが「救護」と熟語されますよ
うに、護られていることに目覚めることによつ
て、諸々の束縛から解放されるということで
す。護られているとは、誰が、誰に、何から護
られているのでしょうか。

まもるといふは、異学・異見のともがらに
やぶられず、別解・別行のものにさへられ
ず、天魔波旬にかされず、悪鬼・悪神な
やますことなしとなり。

と教えてくださいました。このお言葉の意味
を、現代の私たちの生き方にそって述べます
と、日の善し悪しを言ったり、占いや呪いに
走っている人たちが阿弥陀如来の「我よく汝を
護らん」のお心に遇う（信心）ことによつて、
なにもものにも惑わされない人生を賜るとい
うことです。すなわち日の善し悪しに惑わされず、
墓相、印相に惑わされず、祟りや霊も恐れな
い生き方が阿弥陀如来に護られることによつて恵
まれるのです。それが「救」なのです。

次に「拯」ですが、この字には「すくう」と
いう意味と共に「あげる」という意味がありま
すから、文字通り「すくいあげる」ということ

なのです。誰を、どこから「すくいあげ」てく
ださるのでしょう。周りの全てのものを飲み込
んでしまう大河のような貪りの心の中で溺れて
いる私たち。全てのもを焼き尽くす大火のよ
うな瞋りのなかで身を焦がす私たち。すなわ
ち、煩惱の水火の中でのたうち回る私たちを、
阿弥陀如来は「すくいあげ」てくださるので
す。自分の貪りを当然と受け止め、自分の瞋り
を正当化していくのが私たちです。

自らの煩惱を当然と受け止め、正当化してい
くままが、房能の底なし沼に沈んでいく姿なの
です。真実の、み教えを聞くことによつて、こ
んな自分の姿がしられ、こんな自分を案じて
抱きしめてくださる阿弥陀如来に目覚めると
き、私たちは、自分の煩惱を正当化せきなくな
ります。自らの煩惱を正当化する「我」がはた
らかなくなると、阿弥陀如来のはたらきによつ
て、自然に煩惱の泥沼から解放されるのです。
このように、自分の煩惱から解放されるのが、
「拯」です。

「済」は「わたる」とか「わたす」という意
味です。「救済」「拯済」と、「救」や「拯」
と熟語されます。「救」・「拯」がそのまま
「わたる」人生となるということなのです。ど
こから、どこに「わたる」のかといいますと、
「迷いの世界」（穢土）から、「さとり」の世
界（浄土）に「わたる」ということです。

ですから、浄土真宗の「すくい」とは、阿弥
陀如来のお心に遇つて（信心）「まもられ」
「すくいあげられ」て、浄土への人生を歩ませ
ていただき、この身終わつて仏に成させていた
だくことなのです。

（広島・光徳寺ホームページ）

稱讚寺 行事予定

二〇二二年 五月の行事予定



一日(日) 日曜礼拝 午前10時

六日(月) のんのん法話会 午後2時

八日(日) 日曜礼拝 休座

十五日(日) 日曜礼拝 午前10時

十六日(月) のんのん法話会 午後2時

二十二日(土) 親鸞聖人降誕会 午後2時

二十二日(日) 日曜礼拝 休座

二十六日(木) のんのん法話会 午前2時

二十九日(日) 日曜礼拝 午前10時

※朝のおつとめ 午前七時

※夕のおつとめ 午後六時

思うこと つかねえば
また っ

二〇二二年「心のともしび」五月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。

つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。

合掌

記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 01000-4-69957
加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちよ銀行
店名 一〇九(イチゼロキュウ)店
番号 当座 0069957
名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記(愚案)

この間、令和四年度「国民年金保険料講座振替額通知書」のハガキが届きました。

開いてみると、4月から8月までしか金額の記載がありませんでした。

何かの間違いかなあと思ったのですが、9月から請求がないということ、六十歳になるからだと気づきました。

支払わなくて済むのは、ありがたいと思うと同時に、何か寂しさを感ずきました。

ついこの間までは、もう五十歳か、それでも、まだ五十歳と思えていました。が、今度ばかりは、もう六十歳かと思えます。が、まだ六十歳とは、自らはもう言えないですね。

目上の方からは、「まだまだ」と言われそうですが、年下の方から「若い」と言われ、調子に乗ってしまうかも知れませんが。

布教所開設から二十年経ちました。「心を仏地に樹て念を難思の法海に流す」のご信心に添える生活を心がけたいと思うこの頃です。